あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 56 号

発行日
2025.07. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
（井上講四宅）
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○待つ日があるということは、いいことである！

先日、東京時代の職場の同僚であったSさんと、何と沖縄で再会を果たした！というのも、彼は、最近沖縄に引っ越ししてきているが（永住とのこと！）、とにかく久し振りに会おうということで、事前に約束をしていたのである。何故か既に？私より那覇市内のことをよく知っており、彼の案内で、落ち着いて飲食を共にすることが出来た！かつての職場のこと等が話題となり、昔話に花を添えたわけであるが、私の知らない内輪話もあって、結構面白かった！いずれにしても、彼とはまた、近いうちに会うことになるであろう⁉

それはともかく、最近は、珍しく懐かしい再会の機会が多く、カレンダーに目を遣ることが多くなっている（と言っても、一月に1回くらいであるが！）。しかも、来月は、娘達も帰ってくる！要は、意識的に「待つ日」が、増えているということである！ただし、同じ待つでも、例のＶＮＬ（バレーボール・ネーションズリーグ）の日本戦（男女共）だけは、別格である（今年はU・NEXTで観ているが、去年も書いたように、彼／彼女らの活躍は、実に爽快である！否、感動的である！）！

ということで、今回は、人間（特に高齢者？）には、「待つ日」があるということが貴重であるということを書いておきたいわけである！過ぎ去る日々の中で、「あと何日で○○がある／△△に会える」とかいったことであるが、それが、何故か嬉しいのである！まるで幼子のようだが、そう思うのであるから仕方がない（笑）！それだけ、安穏とした日々を送っているということでもあるが、考えてみると、人には、様々に、その「待つ日」がある⁉何かの記／祈念日であったりもするが、逆に、そう出来ない日々もある？複雑である！

○「何が」より、「どう」問題なのかが重要なのだ！

さて、先日、参議院選挙が終わった！結果は、メディアの予報？通りであったが、ますます政治の世界の変貌（混沌？）が進んだようにも思える？古い枠組み（既成政党）が色褪せ、別な顔（政党・団体）が彩を添え始めた恰好に見えるが、果たして、それはどういうことを意味するのであろうか？一言で言えば、そこに、変革を求める人々の思い（現状を何とかして欲しい！）が大きく入り込んでいることは間違いないが、この先、どういう展開が待っているのか？そこが、ある意味では危惧される？

それは、まさに「民主主義」の根幹（主権国家の存立）に関わることであるが、要は、その時だけの票の取り合いではなく、「何が、どう問題なのか」を、みんなが真摯に議論すること（特に、「どう」という部分）が重要だということである！例えば、今回の選挙結果、すなわち「大衆迎合主義（○○ファースト等→「トッピング」／上辺に盛られたものに魅せられた？）に陥ってはいけないということである！だが、これは、何も我が国だけのことではない！世界の多くの国が、そうなろうとしている⁉

いずれにしても、まがりなりにも続いてきた戦後レジームが、ここにきて大きな地殻変動を見せ始めていることは事実であり、既成勢力や政治システムでは、最早どうにもならないというところまで来ているということである⁉したがって、問題は、それをどう克服していくかであるが、折角創り上げてきた「主権国家」による共存・共栄の形まで壊してしまったら、それこそ人類は破滅に向かう⁉今は、その大きな分岐点とも言える⁉

○ある意味、最初から分かっていること⁉

ところで、マスコミでは、あまり騒がれていないようであるが、過日、次期学習指導要領に向けた改定作業を行う中教審特別部会が開かれ、文科省が、教員が児童生徒の成績をつける際の仕組みを見直す方針を示したということである。その中で、現在、観点の一つとされている「主体的に学習に取り組む態度」を、直接「評定」に反映させない方向で検討しているという。適切な評価が難しいとされ、現場の負担が重いとの指摘が出ていたともある。だが、それは、ある意味、最初から分かっていたことではなかったのか？「評定」を行う教師側からすれば、かの「働き方改革」にも通じるものであり、おそらく大歓迎されるとは思うが、その反動を見越すと、少し（否、かなり？）危惧される部分もある⁉

というのも、それがなくなると、現実には（残念なことではあるが？）、そこの部分への注力が減退し（子ども達はともかく、教師の側にも！）、そこへの関心が薄らいでいくのではないか？「観点」としては残すが（大切だということは示しておく）、いわゆる「評定」の対象にはしないということであるが、果たしてそれでよいのか？私からすれば、そもそも「評定」を三つの観点に分割し、それぞれ別個にそれを行うということ自体が問題だと思っているが、それぞれが密接に連環しているものの一つだけを取り除くことは、配慮の意味を超えて、結果的に間違ったメッセージを子ども達や親御さんに送ることになるということである（つまり、「評定」の対象にならないから、それは必要ないというそれ）！

ちなみに、「評定」とは、学期毎に通知表などの形で示されるものであるが（通常、小学校3段階、中学校5段階。現行では、教科ごとに、（1）「知識・技能」（2）「思考・判断・表現」（3）「主体的に学習に取り組む態度」の三点を評価総括し評定を定めている）、（3）については現在、学習に能動的に関わったかどうかや、粘り強さなどが評価の軸として示されているが、ノートの提出頻度など形式的な事実で判断するといった例が散見される他、子どもに評価内容を前向きに捉えてもらうよう伝えることが難しいなどの課題があるとされている。だが、そもそも何のためにそれを行うのか？負担の軽減の問題で済ませてはいけないのである！（井上）☜

○「プロシューマー」？だが、本来はそうであった？

先に、「エンゲージメント（アンガージュマン）」とかいったようなことが、改めて主張されてきているということを述べたが、今回は、その連環と考えられる「プロシューマー（生産消費者）」について語りたいと思う。同語は、「生産者（プロデューサー）と消費者（コンシューマー）を組み合わせた造語」で、「消費者と生産者の架け橋を意味する人／事」のようで、サービスや製品を開発する際に、生産者は消費者の考え・ニーズを取り入れ、顧客視点で考える必要があり、時には実際の消費者に開発プロセスに参加してもらい、価値を共創するというようなことだそうである！

それではなぜ、そのような用語が出てきたのか？その理由は、「成熟した経済・市場においては個々の消費者のニーズを深く捉え、品質や価格以外の付加価値をもつ商品やサービスを提供していく必要」。だが、一方で、「新規サービス・製品を市場に投入しても、製造コスト、技術力に大きな差異はないためすぐに模倣され、コモディティ化（市場参入時に、高付加価値を持っていた商品の市場価値が低下し、一般的な商品になること）する。コモディティ化したサービス・製品を消費者に選んでもらうには、『ロイヤリティ』や『愛着』が一つの大きなポイント…人間はモノや人との繋がりが強ければ強いほど、その対象について『ロイヤリティ』や『愛着』をもつことができる。」とある。

では、その強い繋がりは、どうすれば獲得できるのか？それは、「消費者自身に開発プロセスに参加してもらうこと。消費者が開発プロセスから参加し、ともに商品を作ることでサービス・商品と繋がりを感じ、ロイヤリティ・愛着を持つことができるということであるが（無印良品、ウィキペディア、オープンソース）等）、だが、これは、ある意味「回帰」なのではないか？元々人間は、そのような形で生きてきた？生産と消費は、まさに同一であった？それが、徐々に二極化（市場経済化）し、別々の世界となった！多少強引ではあるが、そのように思えなくはない⁉

○二項対立／二元論では、最早社会が成り立たない⁉

ということで、今回、ここまで書いてきて、改めて感じ入ったことがある！それは、端的には、「二項対立」あるいは「二元論」的理解では、政治にしろ、経済にしろ、はたまた教育にしろ、最早その既存の考え方・システムがうまくいかないということである！極端に言えば、社会全体が成り立たないということであるが、その意味では、それは、ある種の危険シグナルかもしれない！だが、よくよく考えてみると、あらゆるものには両極があり、それぞれが、それぞれの意義と力を主張し、その対立と緊張関係を作って、現実（世界）を作り出してきた！それが、漸く？本来の姿に戻ろうとしているとも言える（元々多様、多元なのである！）⁉二項対立や二元論は、ある意味分かり易いが、創られた幻想でもある（抗っている国や勢力もあるにはあるが！）⁉だからと言って、無秩序や安易な予定調和論では埒が明かない！新たな知恵と力が必要となる⁉問題は、そこが、どのように希求されているかであるが、危険要素は、その解釈（利害？）の違いにあるということである！

〈短歌に託して～「待つ」喜び？を感じつつ！～〉

・待つ日がある！　信じ難いが
**　それが嬉しい？　老おいの証しと知りつつも？**

・「何が」より　「どう」問題なのかを
**　語り合え！　みんな幸せになりたいのだ！**

・難しさ　分かっているのに　何をいまさら？
**　問うべきは　「評定」の意義なのだ！**

・人間には　生産と消費の両面が必要！
**　だが本来　それは同一であった⁉**

・あらゆるものに両極あり！　だがそれ自体は
**　正義（覇権？）の源泉ではない！**

〈特別コーナー～堂本彰夫の古代史旅枕５６～〉

○ここからは、九州での隠れた事績を追う－その１１－

さて、ここでもう一つ、当初から気になっていたことがある！それは、かの「狗奴くぬ？国」の存在（位置）である！「狗奴」が「くぬ」で、熊（球磨、つまり現在の熊本県辺りにあった国と考えられるが、前述のように、三国時代の「呉国」と深い関係があったとみられる。すなわち、その先祖は、紀元前5世紀頃に、肥後菊池方面に渡来した呉の王族とされる⁉『魏志』では、邪馬台国の南とある！「免田式土器」が、その版図を示すと考えられるが、3世紀中葉に、件の「邪馬台国」と攻防をなしたとされている（「素より和せず」←狗古智卑狗（くこちひこ／まこちひこ）／卑弥弓呼）！

しかるに、その狗奴国（勢力）が、先の「高良山周辺」に北上していることは分かるが（かの「免田式土器」が、その辺りまで広がっている！）、その後さらに移動し（山陰経由？）、丹波方面に、その勢力を築いたようにも見える（「粟鹿（あがの）神社」等？）⁉ただし、かの纒向の地に新しい拠点を造ったのが、この国の勢力であり、名前も、「狗奴（旧奴）国」としていたという説には（あるブログによる）、ある意味では賛同する部分もあるが（その国が、もとより奈良周辺の地にあったと言う説／邪馬台国近畿説は論外であるが、要は、「邪馬台国連合」のその後の話としては、そのことは、ある意味あり得る？）、それが、陳寿が記していた「狗奴国」とは言い難いということでもある⁉

ただし、それには、『魏志』より後に書かれた『（范曄の）後漢書』の記述が影響しているのかもしれない（そこでは、かの「狗奴国」が、「邪馬台国（連合）」の東で、一海を渡ったところとなっている！）⁉だが、そもそもその『後漢書』は、『魏志』の１５０年後の著作であり、しかも、著者の「范曄」は、他の関連著作等も勘案し、自らの修正を加えているらしい（これは、確かである！）！時代的には、かなり後の著作であるので、より正確な（後の状況を見ての？）情報提供なのかもしれないが、本人の恣意（解釈）によって、却って事実を損なわせている恐れもある⁉ただ、状況の変化があって、そのように判断したことも、十分考えられる？（つづく）　（堂本）

〈編集後記〉狭い日本だが、多種多様な日々が流れている！暑さもそうであるが、人々の関心事もそうである？だが、そこには、紛れもない真実が横たわっている！人々は、そこで喜怒哀楽し、自らの人生を送っている！そしてそこに、「待つ」が組み込まれている！絶対に、そうである⁉　（井上／堂本）